



号 へ13
3189

へ13
3189

江村
藏書

好色江戸紫

才一 送利送りのうきぬ情なさけ

金月乃うらうおとこや意れうら

才二 仁儀にぎぎハえらあさ今いま

あま山志村小阿ま家君うら

才三 正真まさまことき日月乃情なさけ

あまいあれさい乃あひいふまれ物

才四 力を捨すててうら毛けら扇あふぎ乃

あまを扇我知る妹のよあおーハ

目録

皇澤文庫

昭和九
十月一日

才女

おれ 衣ハ童ハ乃戀

と云カヤ西ニハスレク死付

乃程ハのまぬ情

花ハ雪よ色何をわけてさうら枝をうしあよされたと
て誰^{たれ}長生をうもつへさふあーやうあう新愛うちよこ
そあさけふく色このまうらおのこハ玉の盃の危^{たひ}あさうこと
又ちささあふ

意^いとて人ハあさけ乃あうらまうことあ^い衣とは是より
あり^あ好^こ懐^わ良^り善^し提^{てい}とさうとれを意^いハ法^ほ乃^のいろはあふ
まことハ親子二代たあ^あ女^に乃^の二^に乃^の何^いりて^て死^しよとまも^も仁^に儀^ぎ
の^の乃^の程^の事^じ又^又とさ^とい^いあ^あさ^さ事^じあり^り愛^{あい}に^に全^{ぜん}月^{げつ}源^{げん}あ^あ馬^ばつ

忠義といいてそのさぬい中が流るをふしてそのわかれ
 を知りまは花咲てらん事をうひてよひね八月のくはあ
 をねね^{福が}ね^ミひて^ミ十字一文字乃言乃を^こ知つてひりくま^て作^られ
 軍一とありん^ちおの^りの^り紀^の要^の之^をも^のぬ^のた^のま^はる^んよ^れあ^ひ
 詩を^らう^へこ^えん^こう^りち^し我^た進^みた^り周^の公^の孔子^のの^をね^て
 さあ^らう^かん^福ん^らよ^むと^う又^うけ^き武^士の^こら^ぶあ^らう^ら
 勇^をを^そと^せり^ねど^うま^君と^世を^近く^めつ^られ^れ
 いま^らけ^つる^れと^し子^の小^の姓^のス^はは^れる^まる^ふこ^のう^ら原^の
 病^をを^けて^まの^よれ^浦の^海士^乃う^らめ^とあ^やま^ひう^らあ^くよ
 りん^まあ^らう^まあ^らう^まあ^らう^まあ^らう^まあ^らう^ま
 さら^らし^よも^あめ^めあ^めあ^めあ^めあ^めあ^めあ^め
 こ^いと^こと^せり^れら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^ら
 う^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^ら
 も^兼同^上旬^の事^{あり}し^は日^よめ^て、^小姓^あへ^れん^らけ^けも
 さ^らり^りし^けら^らら^らの^妻を^ねら^れら^らら^らら^らら^らら^らら^ら
 お^りら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^ら
 く^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^ら
 を^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^らら^ら

忠義といいてそのさぬい中が流るをふしてそのわかれ
 を知りまは花咲てらん事をうひてよひね八月のくはあ
 をねね福がねミひてミ十字一文字乃言乃をこ知つてひりくまて作られ
 軍一とありんちおのりの紀の要の之をものぬのたまはるんよれあひ
 詩をらうへこえんこうりちし我た進みたり周の公の孔子のをねて
 さあらうかん福んらよむとう又うけき武士のこらぶあらうら
 勇ををそとせりねどうま君と世を近くめつられれ
 いまらけつるれとし子の小の姓のスははれるまらふこのうら原の
 病ををけてまのよれ浦の海士乃うらめとあやまひうらあくよ

うらひくらの仕事あつにあらあきん命と云乃とあふに北とさ
らほおろくしとのあまのうまいそふよむと云(6)のまゝと云
れ又女方その思ふまこと中く祐けしてといえれにこそ世方
けれ余にけしてのあひ事ありあふうくん致すけ并と送り
くらおさうとておれよいとをしくちあうあれさるの
はゆりと云むむと一夜のあまけとけしていととあうたはん
おいその人にいれよとてと云きたらやとよと云あふうあ
ふとあ一人とて悟と云ぬいあうあふりやその人れさ
とめもと云ぬいとあうあふりといくといひあふといふれ

右邊のうたをうらとてきよくしとあふりそのあま物
いれとて女にあらあれとのあてんあにといひと云と云いといひ
とのあうらとらにふりてつとあふりあうけしてすあうら二夜
のあまけとけしてと云と云れあ人とよこれ侍のあま物とけ
祐と云くと云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云
と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云
女方おはけ并をよむけれえと云人のんさうと云くさくさ
↑

そらうあうらとめらうと云あふり并日のに帰るあま物

あつらひらねうそのさくらのはしあひんをちうとみそめ
ーらげういぐぬ西事よりすむいしらやうさひよこ子
てゆらせうま人を解てこせりしおよそのまにかり
ましてあさけんをせはの源らとやうー人はてめて
らーいとしんをい糸れむをあまをらんのかとけて
それとらうくーやうくつてをむしめて社を月まはる
年してやせーにはとうよとやーまは日のえーめよー送ら
くろよがやうくわとつてあくくくくせあよ西事源は社を
ういてはんよ入せあしぬをよこを志うくくさひをそ
か

あふかくにさかしくしてはむ二日の中はくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
とあれいりーやああけをえーめん事ととよのあやうをわと
めて毎つうくくくく又あせーさーくくくくああゆんくくくく
此事とさひあうくくくく人のやーいあをせてくくくく
たゆーる

わうあきそを谷川のまうきさくーあ久されてぬき社くあよ
みーあうとせーていあらさくめやくとと近ああうてさひをど
けーとあうといえりーとと又卯月のはあひ送らうらに申さの

とめよふらむらけりてんくま

書ておくらあふんやういとおくをわいふれなれにおい出の
うととひふりきをそやめ人をまよよとふ侍のふとこをま
あふあうら拾ひろちらめんうととえれにされどよとてあくと
えめあやせににひんむるまといふたいうの人れんう一を
おそら一れとにらうとたあふぬこありあふた何であふた
八人のあふいさよとさそその人といふえくたを人たありく
こ一まひゆをけうこいさうつらうさう方のいけらひのれい娘むすめ子あう
おと一と物上じと人まううあひていれよあせあよいあくらをれ

させあふとあり女のぬんけうこまそのぬやハあうくあふめし
けしえつうまうんとそめり日人をけうしてあう多ひなるよ
けうられせらあよとあふそそあよめハとくれと知一とこ一月
神かみこのらえうはとあめれて人の美やう徳とくをまこ一とこい出あふ
ハ待まちわけらるやまはのいらされいをこあふそとあふいこを
どうて一まあるあふいとあひきくやああがのさあひをぬ
いれせの中とさ音ハねいして源のいとの下むもうらとけして
年はあふいふあふとよなるをあめてあふあてあふして
あふこといふておれんことせあふの人と源のあふい

ともかきつひのちれ世^{ウチ}懐^{ウチ}への世^{ウチ}をたのむ事^{ウチ}の事^{ウチ}なりけり
 万代もくらの世の中^{ウチ}にうらやまをいへてうらやまをいへよか^{ウチ}に世の^{ウチ}に
 ちかかきつひのちれ世^{ウチ}懐^{ウチ}への世^{ウチ}をたのむ事^{ウチ}の事^{ウチ}なりけり
 夫^{ウチ}婦^{ウチ}の人も見^{ウチ}送^{ウチ}りて又いつの世れ^{ウチ}なりけりなりけりなりけりなりけり
 此^{ウチ}ら^{ウチ}の^{ウチ}世^{ウチ}に^{ウチ}な^{ウチ}る^{ウチ}事^{ウチ}の^{ウチ}事^{ウチ}なりけりなりけりなりけりなりけり
 の^{ウチ}世^{ウチ}に^{ウチ}な^{ウチ}る^{ウチ}事^{ウチ}の^{ウチ}事^{ウチ}なりけりなりけりなりけりなりけり
 ち^{ウチ}か^{ウチ}き^{ウチ}つ^{ウチ}ひ^{ウチ}の^{ウチ}世^{ウチ}に^{ウチ}な^{ウチ}る^{ウチ}事^{ウチ}の^{ウチ}事^{ウチ}なりけりなりけりなりけりなりけり
 う^{ウチ}く^{ウチ}風^{ウチ}の^{ウチ}世^{ウチ}に^{ウチ}な^{ウチ}る^{ウチ}事^{ウチ}の^{ウチ}事^{ウチ}なりけりなりけりなりけりなりけり

こぞ此^{ウチ}の^{ウチ}世^{ウチ}に^{ウチ}な^{ウチ}る^{ウチ}事^{ウチ}の^{ウチ}事^{ウチ}なりけりなりけりなりけりなりけり
 仍^{ウチ}日^{ウチ}れ^{ウチ}の^{ウチ}世^{ウチ}に^{ウチ}な^{ウチ}る^{ウチ}事^{ウチ}の^{ウチ}事^{ウチ}なりけりなりけりなりけりなりけり
 玉^{ウチ}乃^{ウチ}ち^{ウチ}の^{ウチ}世^{ウチ}に^{ウチ}な^{ウチ}る^{ウチ}事^{ウチ}の^{ウチ}事^{ウチ}なりけりなりけりなりけりなりけり
 ち^{ウチ}か^{ウチ}き^{ウチ}つ^{ウチ}ひ^{ウチ}の^{ウチ}世^{ウチ}に^{ウチ}な^{ウチ}る^{ウチ}事^{ウチ}の^{ウチ}事^{ウチ}なりけりなりけりなりけりなりけり
 福^{ウチ}あ^{ウチ}り^{ウチ}の^{ウチ}世^{ウチ}に^{ウチ}な^{ウチ}る^{ウチ}事^{ウチ}の^{ウチ}事^{ウチ}なりけりなりけりなりけりなりけり
 は^{ウチ}れ^{ウチ}に^{ウチ}な^{ウチ}る^{ウチ}事^{ウチ}の^{ウチ}事^{ウチ}なりけりなりけりなりけりなりけり
 思^{ウチ}ふ^{ウチ}事^{ウチ}の^{ウチ}世^{ウチ}に^{ウチ}な^{ウチ}る^{ウチ}事^{ウチ}の^{ウチ}事^{ウチ}なりけりなりけりなりけりなりけり
 見^{ウチ}ら^{ウチ}に^{ウチ}な^{ウチ}る^{ウチ}事^{ウチ}の^{ウチ}事^{ウチ}なりけりなりけりなりけりなりけり
 病^{ウチ}死^{ウチ}き^{ウチ}ら^{ウチ}の^{ウチ}世^{ウチ}に^{ウチ}な^{ウチ}る^{ウチ}事^{ウチ}の^{ウチ}事^{ウチ}なりけりなりけりなりけりなりけり

はまきしくちらひなりやをなほとどしんれをほけんはけ
てみーにあつる左きりくさうれりあてたえととのいし
お忠よめて

ふむらのあつたるこ此より一たあさう
めあともさうぬ人こころう

くいれらうに深れたあめうさそこちりて
ちんじや人の心をちんじやゆ

めゆりりり此ゆあさう人に

かくていりふささうれらうあさうゆとめくけあはよと

まうされとてとどしかりやとさうあうぬ病のまうら
捨おくも^{うかり}捨うまありとさあく心をささやがさうかくに
けしうおを^{うかひ}さういやしてあ人うしあひてこせとどしあり
ああがーはあさうくぬさうくうとよさ^{うかひ}と云葉
をさうーアをさあてうのあ人う^{まかひ}次^{まかひ}をさう中上まら^{まかひ}
あううとほたあはは同うゆとんてまおゆめなをりあけら
ゆいあとのゆなりまうて仁義をかひんさる者あれはあ
の事あしとさうやなれこい^{まかひ}後道の介あ
はんらまがーとさう一ゆあはせんぶとけさあめんあ

浮世に身をよめる人たゞある者ありて是も身を以て
のりて行けりて是も身を以て人か運めざるものとたゞよひ
あつてはなる

仁我ハチウカ死命

去るに星合忠也いふに信りては教をよみ兼て
アキラカニテ行はば後世に及ぶと我ら心をよむ
クをさるるありては事の事あるは不義ありて
中世にさるるありては事ありては事ありては事ありて
をさるるありては事ありては事ありては事ありて
かゝる世に生るるありては事ありては事ありては事ありて
のち世に生るるありては事ありては事ありては事ありて
浮世に生るるありては事ありては事ありては事ありて

おーかしぬ命より何したにあらうして

目のみりらえけもさううー

ちくちかや仲見かきーせんねき色さやーこのあこーかん

ゆけをこよし

おーあやゆーくよとひ定てうく舟をおくりなごよのうえね
んもほーんありさうくのうまぬまぞうーあやううくあひま
女房のあめこれあかして眼こくよのうーふあどくーそれい
かくとまてたんい宿ほのさるげん源一印もわえやこよあま
とこいあやううこいあふれどよのまあよよたかこいよとあ

いととひんあらあな女方をよびてあしくやされくらんおあ
せり科あやーう君台門と作りられまあまあーさえ
あーとひあせらまあせいさくあろーさぬこのまあ何
ー南ふのふぬいぬいぬいさくあろーさぬこのまあ何
中ららさのぬんをいようあうされいうそ幸宗のまあ
いぬあまあまあに二世とくらやーこのまのねんあみ
こいさととあまあまあまあーしあといさひのまあうう
海神いととあむえやうとと痛まーととまといあらんを
ぬゆー何とやんといさひいほをりらてさるあそをたあ

ついこのきとやひてまのいの洞ほらをあらとされといふをさへ
 こととかりにきおひつて物されうらあまうにすまいたま
 乃おもんやうもけたのますに社やをけりといふとま
 乃おもんおん机ふけは筆ふでをいふまゝかかれよ夜あくるまの人を
 おうまよれぬかひ福ふくやよけて社神かみのまを何となくたまにけりて
 吹さうよやまをまきまうてあまの刻斗とくになさうす又まよりのま
 切きて惜なむづかひうの切きりて年としをあらえゆあいのま
 ぞうんよらうしをた知してあ方を夜のまうくまよりのま
 ちまふやあひうとちてたまにま入いてこれいけとあひふ

そのめしとていじまをぞれと見入みいりす惜なむま入いりあをさ
 かけつけかりにけい志しやう侍しやくのゆまう法はふかとのまはら
 私わがしあをうすすまよまをまこれいすす又まうし
 いへかひはらとてあうくま枕まくらをよてまはらにまひまめま
 せめてつめ痛いた斗うも出いるまよをねまやけりかると侍しやくの娘むすめ士し乃
 女むすめ方かたふらあれたあやまいてけいまういりてまよまうし
 たらねまみとま子をけりかまよまよまうしかまうし
 あうこれ後あとやれあまうまうくまうて旧ふるなるまま書をま
 又まうし

あまやまやうまの あらひとて 逢ふはうれし
い、あゝ 逢ふはうれし
いふもよらぬ うたをいふ
いふに 人のむねを
流るはせぬ ながしと
そらうすい 逢ふはうれし
人めあまの 逢ふはうれし
天北川 逢ふはうれし
海のまのまの 逢ふはうれし

少く捨て 二のよかしの
あまのまの 逢ふはうれし
い、あゝ 逢ふはうれし
いふもよらぬ うたをいふ
いふに 人のむねを
流るはせぬ ながしと
そらうすい 逢ふはうれし
人めあまの 逢ふはうれし
天北川 逢ふはうれし
海のまのまの 逢ふはうれし

海さむきい	たまもこれ	おあきさんと
いあう	けちてんれ	ぬみき
花乃きん里れ	枝ちうて	情かうらぬ
とまきと本乃	松乃あせと	おひいしに
たれよ風の	と希くて	ちうはきう
尹れはれ	あしよなき	くれ作の
うたやうをむ	あまれさよ	されよあせ
名守の	あやくせ	日の本れ
其れくけて	けいしやれ	んきうらに

あしれと	あしれと	けいしやれ
二ころちう	中あれと	寂れよれ
たのむと	あしこのみの	危きちう
うまきと	穠せ	父らゆえ
あし	ん二つ	うらみ
れむのうれ	うらみ	言せよ
けりあり	ぬき情の	危しう
うらなく	あしれ	まこれ
けり	出れう	うらみ

天をくぐりて
すまをよ
形かよきと
れむあうらう

いなり
二葉此まら乃
夕月と
うくやかく

さしいせよ
原こまけ

あき花枝の月にはとあくる夜
あうや一事もさればまご夢
暗くし武士の及村を夕日夜
志すのふきをさうらあゆも
あさまの鏡くさやあくの上鏡上鏡にたうくまを海へ

二葉の縁をを繋ぎあけて末まし日出度し
ほ生中向深しゆよの母おさいのまいつら夕月
ほあれたあうや書玉あうさか此状さあう印の
あうあいの老中へあうせし

あ方が書玉をいふていういおひされんあうあうも款あう系
波の書玉の行系に阻はりあう只何とあうなけくやうといて
うらうらうとあうは樹はあうあうとあうと事の子あうのあう
何の徒あうもあうと書玉もあうとあうとあうとあうとあうとあうと
あうとあうとあうとあうとあうとあうとあうとあうとあうとあうと

かしくとて死せりやと口かひいりしとてこれと海を
浪されれど母し泪とてくも涙してそはの流るるのつら
まりとてこれれいじりか哀しき人をうらむ天竺といふ
ろの程より大層といへんぞ多し我れくいと愛おらうといふ
我れ早ゆいぢこれらよめれど多しおろくくはやくいふ
けしずといふ泪よりこれらと母はよこしうややくとあ
めくぬておぬのつらふを我れきれ父やとよめたり
せとアウアウといふを娘くう人にせんあさるといひて
おれ一人の事いまれやにうらむものも母はたりとて

りし流るるが情しきとてうらみの流るるに人ごとく
への殿敷の法山を有るよめはうらむ似やよめはよめ
出下るるをうらむにれれくうらむをえよといふこれれ
被の人過ればおろくをけりてアウアウと母は涙を
いふよめかよめと能くえんうらむといふあつやと
くかありあつやとあつやとて目のうらむはうらむ
うらむといふ一平の御みぢらるるまて是れありあり
とてうらむ一人かうらむあつやとてうらむといふ
前とてうらむかうらむしうらむありありとてうらむ

又^レも是^レの^レつら^レと^レも大^レに^レや^レの^レお^レは^レ是^レを^レた^レり^レす
ても是^レの^レ中^レは^レ又^レい^レは^レな^レる^レに^レ能^レく^レ似^レたり^レし^レこ^レ今^レか^レ
向^レく^レか^レん^レぢ^レに^レめ^レつ^レけ^レさ^レく^レせ^レい^レが^レい^レく^レと^レの^レこ^レや^レ
ら^レか^レお^レた^レお^レあ^レく^レて^レら^レの^レす^レま^レは^レあ^レぐ^レい^レは^レの^レ附^レは^レ書
め^レ鍾^レと^レそ^レに^レ是^レく^レれ^レと^レち^レう^レこ^レま^レち^レや^レい^レま^レつ^レけ^レさ^レめ^レ物^レ
せ^レと^レま^レり^レと^レは^レい^レく^レん^レま^レれ^レゆ^レく^レと^レさ^レう^レ群^レり^レく^レ後^レ乃
徒^レや^レり^レと^レは^レい^レき^レて^レら^レう^レう^レた^レと^レむ^レき^レま^レし^レゆ^レふ^レき^レ矢^レの^レめ^レい^レぢ^レ
あり^レ後^レの^レお^レめ^レけ^レと^レ中^レあ^レり^レか^レつ^レの^レ人^レお^レま^レり^レる^レを^レ
何^レと^レを^レま^レり^レこ^レあ^レり^レま^レり^レる^レに^レ合^レな^レり^レか^レや^レお^レよ^レい^レ

む^レと^レ也^レ殿^レ所^レ一^レ門^レの中^レに^レて^レ龍^レ井^レ乃^レは^レ人^レの^レ内^レ
ゆ^レれ^レと^レよ^レつ^レを^レれ^レゆ^レ方^レを^レみ^レあ^レされて^レす^レま^レは^レい^レま^レん^レま^レの
也^レん^レと^レや^レ奇^レれ^レを^レと^レ虫^レ鞠^レけ^レら^レれ^レと^レあり^レ龍^レ井^レの^レ乃^レ上^レ院
よ^レの^レ一^レ事^レ院^レと^レい^レふ^レ及^レび^レう^レら^レぬ^レ大^レ細^レの^レ四^レ才^レ子^レに^レあ^レて
の^レち^レよ^レ右^レ今^レの^レ箱^レと^レい^レふ^レま^レて^レし^レけ^レあ^レり^レや^レ甚^レか^レう^レと^レい
ら^レん^レの^レお^レく^レい^レお^レ敷^レわ^レけ^レみ^レと^レう^レと^レれ^レ敷^レり^レ上^レる^レふ^レう^レと^レ
味^レ保^レま^レて^レ相^レ多^レれ^レも^レい^レま^レり^レも^レう^レけ^レさ^レる^レま^レす^レの^レあ^レら^レう^レ
され^レえ^レ二^レ庭^レ殿^レ所^レ一^レの^レ院^レと^レい^レふ^レう^レら^レし^レあり^レと^レい^レふ^レと^レい^レふ^レ

正五をそ 日月之隣

去りてに海に仲母と叫ひける事にはほとほ後廢をきかたは
をいふ科をうて 廢後を失はぬ事といふ事とてさされたとよ
廢後の四科一めはこれ一父の四科やまうにもぬす只人のさ
へ有りそれよけきて 母の親の教をうていふ之 無法を絶て
捨去しありては教をうてて父の事やうに又母が教に
にせりてやそれまうに海に仲母と打てて海の事をも今
よ包こし一何れを捨去し限りたりしとやく知る事
多か—と有りよし打ててこれとわくはるを母とわたり 母

幼がの事として教をうてけりてはほとほ後廢をきかたは
あり事とていへてはるうらにもかたうて父の事とて人の
あらず其力を失ひ母今よのうんをむよとて一只
けりふまうを 陰下武藏をわたりて捨去しありては教を
とて—又海に仲母とわたりてはほとほ後廢をきかたは
よとてわいさうをわたりては教をうてはるうらにもかた
のうり教とていへたまうめとてはるうらにもかた
ひあり海にあり教をうてはるうらにもかたは
す此教をわたりてはるうらにもかたは

されよと云ふ事からして歌^{うた}が^{うた}の^{うた}は^{うた}の^{うた}も^{うた}や
すらく^{うた}か^{うた}め^{うた}に^{うた}あ^{うた}す^{うた}所^{うた}も^{うた}う^{うた}ら^{うた}地^{うた}さ^{うた}り^{うた}て^{うた}今^{うた}は^{うた}務^{うた}ま^{うた}め^{うた}所^{うた}を
か^{うた}せ^{うた}よ^{うた}と^{うた}云^{うた}ら^{うた}され^{うた}よ^{うた}と^{うた}云^{うた}は^{うた}れ^{うた}に^{うた}は^{うた}れ^{うた}て^{うた}か^{うた}ん^{うた}さ^{うた}の^{うた}さ^{うた}
ア^{うた}ま^{うた}じ^{うた}つ^{うた}て^{うた}思^{うた}ひ^{うた}も^{うた}あ^{うた}ら^{うた}ぬ^{うた}れ^{うた}の^{うた}ま^{うた}れ^{うた}る^{うた}ま^{うた}に^{うた}て^{うた}た^{うた}の^{うた}ま^{うた}
あ^{うた}ま^{うた}は^{うた}ら^{うた}ず^{うた}に^{うた}ん^{うた}ら^{うた}り^{うた}か^{うた}つ^{うた}て^{うた}ま^{うた}ん^{うた}に^{うた}は^{うた}れ^{うた}よ^{うた}歌^{うた}と^{うた}云^{うた}物
こ^{うた}の^{うた}め^{うた}つ^{うた}ま^{うた}ら^{うた}の^{うた}ま^{うた}を^{うた}ま^{うた}ら^{うた}し^{うた}ゆ^{うた}ま^{うた}の^{うた}ま^{うた}の^{うた}ま^{うた}に^{うた}は^{うた}れ^{うた}と^{うた}打
て^{うた}る^{うた}は^{うた}一^{うた}天^{うた}よ^{うた}か^{うた}や^{うた}一^{うた}未^{うた}代^{うた}乃^{うた}流^{うた}る^{うた}句^{うた}よ^{うた}あ^{うた}る^{うた}ま^{うた}も^{うた}し^{うた}た^{うた}の^{うた}と
れ^{うた}も^{うた}さ^{うた}あ^{うた}り^{うた}ん^{うた}さ^{うた}ら^{うた}ぬ^{うた}も^{うた}た^{うた}た^{うた}り^{うた}や^{うた}今^{うた}は^{うた}の^{うた}者
ま^{うた}の^{うた}あ^{うた}る^{うた}に^{うた}け^{うた}ま^{うた}し^{うた}ま^{うた}ら^{うた}ぬ^{うた}よ^{うた}う^{うた}ら^{うた}ぬ^{うた}と^{うた}い^{うた}ら^{うた}ぬ^{うた}

捨^{うた}つ^{うた}た^{うた}つ^{うた}て^{うた}死^{うた}す^{うた}ま^{うた}の^{うた}あ^{うた}ん^{うた}さ^{うた}ゆ^{うた}と^{うた}か^{うた}ん^{うた}さ^{うた}あ^{うた}ら^{うた}今^{うた}は^{うた}あ^{うた}ら^{うた}
ま^{うた}ら^{うた}と^{うた}い^{うた}て^{うた}歌^{うた}と^{うた}云^{うた}は^{うた}ら^{うた}う^{うた}ら^{うた}一^{うた}又^{うた}は^{うた}ら^{うた}ら^{うた}う^{うた}ら^{うた}ま^{うた}も^{うた}
ア^{うた}に^{うた}は^{うた}れ^{うた}も^{うた}ほ^{うた}が^{うた}あ^{うた}く^{うた}し^{うた}て^{うた}ま^{うた}も^{うた}あ^{うた}り^{うた}あ^{うた}や^{うた}ら^{うた}ら^{うた}ら^{うた}何^{うた}も
お^{うた}の^{うた}お^{うた}は^{うた}れ^{うた}ま^{うた}ら^{うた}に^{うた}は^{うた}ら^{うた}ん^{うた}と^{うた}い^{うた}て^{うた}ま^{うた}も^{うた}歌^{うた}と^{うた}云^{うた}り^{うた}知^{うた}れ^{うた}
ぬ^{うた}あ^{うた}り^{うた}只^{うた}母^{うた}ら^{うた}ん^{うた}に^{うた}ま^{うた}ら^{うた}い^{うた}て^{うた}は^{うた}し^{うた}必^{うた}人^{うた}も^{うた}あ^{うた}ら^{うた}す^{うた}ま^{うた}あ^{うた}れ^{うた}と
い^{うた}れ^{うた}ら^{うた}に^{うた}海^{うた}と^{うた}云^{うた}は^{うた}ら^{うた}う^{うた}ら^{うた}甚^{うた}な^{うた}ら^{うた}う^{うた}ら^{うた}捨^{うた}つ^{うた}ま^{うた}は^{うた}て
母^{うた}の^{うた}内^{うた}の^{うた}り^{うた}一^{うた}ま^{うた}あ^{うた}り^{うた}て^{うた}父^{うた}と^{うた}歌^{うた}と^{うた}打^{うた}つ^{うた}た^{うた}と^{うた}の^{うた}ま^{うた}を^{うた}は^{うた}ら^{うた}とい^{うた}え^{うた}き
ら^{うた}ら^{うた}され^{うた}た^{うた}ま^{うた}は^{うた}何^{うた}も^{うた}な^{うた}し^{うた}り^{うた}も^{うた}あ^{うた}ら^{うた}う^{うた}ら^{うた}て^{うた}歌^{うた}と^{うた}云^{うた}知^{うた}れ^{うた}ま^{うた}の^{うた}
織^{うた}山^{うた}が^{うた}流^{うた}る^{うた}の^{うた}河^{うた}に^{うた}を^{うた}ま^{うた}ら^{うた}れ^{うた}ら^{うた}ま^{うた}の^{うた}ま^{うた}も^{うた}ん^{うた}は^{うた}ら^{うた}て^{うた}流^{うた}の

の昔と由而地と報載一人もの一筆に中りとさひて後手抄ハ
をれ其の葉と足とさひ下知て後と違ふはこれなま方とて人
を利を奪して中らるる是れ多くと云ふは此葉論と中合ん者
ありて金くちさの心さりて一紙に終る細き四筆をらるる麻紙
其の分てさびしと思はるるは物名由らるるのよん子小娘なる
ゆかちらふ八報抄下まの也之代葉と伊代のまゝなあり一方あり
ぬ法々其を忘るはさるる此事一仕よりすす後手月々
アありといふは思ましくけをうむい一家に何まご一筆にをかく
一人のめんさ、思まご一箇札をかす後手り種梅人のぶんに

どうして必を失ふ事一は前世の業因の梅人法家よるさる
にあつての因家の法大事と改めらるるをゆかちる者如る後と
まぬみすい思ふ方へ流るるをさるる状又思ふ甲乙物者方(きん
寂期)の物と思ふ今世にけは後とすむくとまれば今下をおこ
化をわさるるに似たりさるるにどうして寂期とさるるあはれ
さうして下りけさるる後彼の後をたしきく(を)切てあんに
ふむらるるにあつては生(に)針の法也とも思ふあはれ
是れ也

寛文十三年丑ノ三月十日法華寺御役所日蓮寺の忠信を左判

扱又也あつ快もかろゆり舟一く大守公さうたにけら道宗
くも世も服^{ふく}世^よ世^よをうあさせあひていふ成^{なり}成^{なり}のそてい
書^{しよ}を南^{なん}をふんせとらと仰^{おほ}出^でされたれだに海^{うみ}家^か中^{ちゆう}のうら高^{たか}た
中^{ちゆう}上^{じやう}は^は之^の後^ののちうく世^よに上^{じやう}ささせあめとあ^あまうと志^し望^{ぼう}をら
生^{せい}さかあ人のまうさうり事^{こと}は^は彼^かに^にさうくけ^け特^{とく}也^也は
うらあをあうたり所^{ところ}にせんあ^あた^た人^{ひと}彼^かに^にさうくけ^けを
くもあ人^{ひと}のうら^{うら}の事^{こと}あ^あるもまよせん志^し望^{ぼう}をらあ^あん
らそ^そけ^け特^{とく}に^にまうもあ^あるを^をけ^けを^をけ^けて^てた^た書^{しよ}を
もさう上^{じやう}まよとさうくかくまもと^とな^な定^{ぢやう}け^け上^{じやう}まよと^とは^はい

こ中^{ちゆう}の^の所^{ところ}ふい^いあ^ある^るさ^さい^いう^うら^ら志^し望^{ぼう}をら^ら由^{よし}由^{よし}法^{ほふ}法^{ほふ}知^ちを
化^け因^{いん}は^はの^のり^り取^とり^りお^おと^とう^うさ^さて^てせ^せめ^めて^てお^お人^{ひと}科^かを^をら^らさ^さす^すひ^ひ
く^くが^があ^あゆ^ゆ世^よに^にあ^あん^んの^のり^り上^{じやう}ん^ん大^{だい}守^{しゆ}を^を仰^{おほ}け^けと^と何^{なに}
ほ^ほ五^ごた^たら^らよ^よあ^あわ^わて^て不^ふ義^ぎた^たじ^じと^とい^いは^はせ^せう^うに^にせん^{せん}く^くさ^さけ^けを
引^ひら^らせ^せう^うあ^あふ^ふと^と方^{かた}自^じ害^{がい}の^のよ^よ科^かが^がま^まう^うて^てこ^こを^をと^とり^り
に^に從^{じゆ}ふ^ふと^と入^いる^るに^にそ^そい^いに^にあ^あり^り何^{なに}等^{とう}も^もそ^そを^を恨^{をん}み^み
め^めと^と仰^{おほ}あ^あれ^れは^は強^{じやう}し^しか^かあ^ある^るも^も其^{その}道^{だう}利^りの^のり^りあ^ある^るも^もそ^そを^を
は^はす^すと^とい^いて^て下^{くだ}ら^らう^うめ^めに^にす^すの^のあ^あく^くあ^ある^るも^もい^いふ^ふに^にあ^ある^るも^も
さ^さい^いん^んと^とい^いて^てし^しや^や一^{いつ}延^{えん}喜^ぎ帝^{てい}も^も天^{てん}滿^{まん}五^ご科^かの^のり^り一^{いつ}か^かん^んと^と

めておこや一何伊年の大虎の徳をうけてまきくはくしは後これ
多あがりいけてはうらみこすことごとく又ゆかり何ふあぬ
何と云ふと伴うるにあの十と本原の命とせんさうをかく
みくしとふくむれとよりや一旦賜とせせ其上は未だ
伊仲款を聖方と打てはくた何んかやにおよす知れい
今にまうすべし今分任をうらまるともくし一ぬた
ハ原をなら進言す武松人うらまるともくしとてちくし
りされせめて伊仲やせらやの命とせせぬれと作らぬ
親の共るかうとは前と云ぬ進言人くても母今進言

一みくしとふくむれとよりや一旦賜とせせ其上は未だ
伊仲款を聖方と打てはくた何んかやにおよす知れい
今にまうすべし今分任をうらまるともくしとてちくし
ハ原をなら進言す武松人うらまるともくしとてちくし
りされせめて伊仲やせらやの命とせせぬれと作らぬ
親の共るかうとは前と云ぬ進言人くても母今進言

兵敵の事此の言よりいへば、
我々がいへば、
ハゲとせいんやその切合のたつを、
せいつくの人あつと、
一、二の切合よ、
の大事もあつと、
入るすゝあつと、
せらふと、
このまゝ、

斗が甚うらに作をまゝ、
のまかに

と、
り、

とあつと、
と、
は、
あり、
と、

深く申け事と付ておんをやらさぬ事と申ひたれん
母と事りて中々に教へん事ありあつたはなきてはのちを
うらぐらひと申ふ事と申ひたれん心その罪をうら
中と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん
そのとがうらひと申ふ事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん
おん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん
うらぐらひと申ふ事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん
又申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん
さんぐいの事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん

刃を捨てうらぐらひ道

さう程不潔と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん
の事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん
叶ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん
又申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん
うらぐらひと申ふ事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん
遠くよと申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん
死て刀振うらぐらひと申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん
心と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん事と申ひたれん

親の欲づく世もねらさざといひ波の若何んを大て捨見を
ついでにぬさる作人たふとあは流しとよめて能えたる我ら
さらばなれさふあふれ一されさあに併りのんといひあは
大小を後足一歩のあひのあはせぬらうとて是れいふと
能くけつた親波の若ふ似て追ことあつてこれだんたごひと
併し介つてされてせつぐ之らに主のさめてこそあつとてな
るこそ一あつてこれとていふおれもあつとす又きてるやのあ
まにたあ一あつとていふあつとていふあつとていふあつと
まじりたりとていふあつとていふあつとていふあつとていふ

も中も物まをるのらんは波つらたあつてこれとていふ
あつとていふあつとていふあつとていふあつとていふ
法入のやとていふあつとていふあつとていふあつとていふ
大馬つとていふあつとていふあつとていふあつとていふ
全月海印とていふあつとていふあつとていふあつとていふ
さすは高代とていふあつとていふあつとていふあつとていふ
よく似るもあつとていふあつとていふあつとていふあつとていふ
とていふあつとていふあつとていふあつとていふあつとていふ
あつとていふあつとていふあつとていふあつとていふあつとていふ

いふれからに妹おはひのこれにせねそ人らよめ道つまにあり
あいはらうとさあひつひ多しやさうしうとと敬のそめなれ
家を定めずとそとさねらり吾人の敬を見ひて固くと
ゆりあつといふ敬尚地ふりうとこれに中とるひの起ると
作らまおあまの事と佛よあひせしとまんとしに
せいでん此法をあれむを多ひては力もほ中起らあてい
うて尋ひのらもあぬもあしとせとに法た徳はひ世や
あつこ子におういらしてあつたせとけらとしかし佛事
ありあつて起ひてこれとが力たるとまもその

心ゆと一うが又とつねいふるむいふとまを
とてこ一におあ一がたうとそあつらと起ひあ人を
物がる(はまう人足す)の契約と一といふれま一ねらむ
程としましあみくわりしよれくりまことあかくけいねを
ゆりうひ死くうとあえんうらと敬ようと佛らと作幸ひ光
敬の名をあらえとらうけつ紋のむあつと敬九のゆああを
と作まうし加つたの役を行きて彼のそれよあをこまも
敬おとらうとそと知をとら我も中室ととそひきてあつた
とそととためさる社佛園とあう毎日彼の海分ようい

とて玉のれと移りたる感る所いよを谷中村甲の村玉井
寺へ移りて鬼子母井牛忠よりあふ信目より玉動の之振
何れ玉井よりやの信を坂小六よりよめ井永田をいよ玉
権現いづくに祈りまうしゆし何れ有り又まの目より玉動
を名にこの二信是より子雲同八まんあふこまに大権現
をんめいそ天恩大井町よりまの福をかりて門政よりあ
とより福を乃と永代橋の信永井をいよ玉満玉井より信
よりよりそ二信より業平権よりまの福よりいよまの
いよまの業平も國橋を越してまの所に大古玉井よりいよ

實にまの堂をまのにアてけしと詰いも後まの報せ者
にまのいひの報をいよまのまの西りんやし雲信水寺
と拾と同きとて廣法寺前の福を雲とまのつ、只淨舟
にまのて玉のれと移りてまの既より信を月の娘より信月此
ありとて玉のれと移りてまの此言好まのいよまの
孫より母妹乃事とてまの正月のよまのいよまのいよまの
らる切りし七茶もまのつと、いよまのまの也又まのまのにまの
あふまの扱は枕よりまのいよまの但し一井の厚人よりまの
いよまのまの命をいよまのいよまのいよまのいよまの

中よりいさぎよしありこのあきけの野

とよれどぬの遠た境のさうりなぞ

さうりといぬるいあやう おけ

まどうしを遠くもろいといふ言ふと道しとてうらほ
りてを遠く中よとありてはすれ契約を定て保し
遠くを日遠して車坂よりぬきまをむつらへおし
中りて母よりいいて隠す事ありておの次す
かろきる母もあて保しけりしるらむらとあり
さかるとをけりてと名す人ありといふ多ひなり

長い童人の乃忘所 歌討

其は非都遠た境のち多ひの事しはのま乃やまめい
くふと中よと素乃保し中ありては下岩をとな
とよれどぬの遠た境めろきまや保しけりな
力を捨ててをさうりといふ乃さうを遠たよ
ん代してうらむいまくちさうらるまをよ
けりてを遠く見らぬの世命とよひらに
あつた遠た境のさうりといふま
さうりにさうりといふま

たてふらふすがをこぬ出でて余の阿まひとにうらむらひのこと
まらまらすはとあつと改^まより書^まとせんとはつとまて家^と
陽^まよりを海し仲おとろまこころとんたれおのむらやん此やま
のらをも何ともまめまぬくまるとまめてむいとまればまて
武蔵人さすすくにうけてまらまら
まらぬもはらららまらまらら
むらぬまらららららららららら

まらぬまらららららららららら
くは折まらぬ花をまらぬあん

かく書ておにいざれつと海し仲やまらららららららららら
め小まらいまこ二葉のまらら我まらららららららららららら

我まららららららららららら世の中に
いくせりまらららららららららら

陽^ままらららららららららららららららららららららららららららら
たれまらららららららららららららららららららららららららららら

林はららら二本此中の風まらぬえ
くまらららららららららららららららららららららららららららら

とまららららららららららららららららららららららららららららら

まで十ヶ年斗先右は左をわきま出入りしつゝ定て足許の
まがたよりくえあつたりまひあつしとよひもぬ孫みぢり
くお又梅田侍進いま中へおめ院不強まをちりしが彼
徳馬をえてゆきまにといふや歌めめすことと崇ちよ
けてまをもとて四つむひ徳うかけ一人足手打連しあつた
又いま九十一は五斗之下人一人ついでいひくあつたとい
ふれい歌い足手あつたあぬあまきうくおぼすたは江にた
いぬふりうまきうしてなぬぬれぬりしうおまよやにあつり
やせうとことおまはあつたあぬ梅田いぬ人まよしておまはあ
つた

もまき多たつぬへいしと彼右まりの所をまらつて居る
これいしゆゆ目えまきをまねむしやちるえ方又おれとも
まがた方のまきとちりくとまらつて居るまのまきりまに
ハ減ふとまがたのまきといひぬまきといひまきまきま
うしろまらうりしゆゆゆ人まきとてまきとてまきとて
ハまのまきゆゆゆまらうりまきゆゆゆまらうりまきとて
拾五まきまきの歌あまきとてまきまらあつたあつた
切てかゆゆ人何もまらまきのまきまらまきまらまき
まらまきと一期まらまきまらまきまらまきまらまき乃

